1　はじめに

近年、″石油ピーク″が言われ、多くの環境問題がますます深刻化し、持続可能な社会が論じられていますが、未だに多くの国において、経済成長率を高水準で維持するために、大量生産、大量消費、大量廃棄システムを必要とするという社会構造が続いているようです。
もったいない学会は、「脱浪費社会・心豊かな社会」を目指していますが、その社会像がより鮮明になるためにも、まだ規模は小さく、初歩的な段階ですが、我々が三重県鈴鹿で 14 年間試みてきた都市型のエココミュニティ、「アズワンコミュニティ」の実践例を紹介してみたいと思います。

2　都市型エココミュニティの挑戦

2-1 アズワンコミュニティの試み

名古屋から約 50 キロの所に三重県鈴鹿市はあります。F1 で知られる約 20 万人の地方都市です。この、何の変哲もない地方都市で、エココミュニティの試みが展開されています。

その特徴は、人と人が家族のような親しさで繋がり、「心豊かな社会」を目指すと同時に、「物とエネルギー」が必要な所へ最適に流れ、活かされ、無駄がなくなることも目指します。

人が安心して快適に暮らし、人として成長するにつれ、凡てを大切にしたくなる心＝「もったいない精神」が自然と育まれていきます。

2-2 市民によるまったく新しいコミュニティづくり

アズワンコミュニティ鈴鹿の目的は、争いのない幸せな世界の実現です。

つまり、自然と調和しながら、怒りも争いもなく、罪も罰もなく、一人の不幸もなく、どの人も家族のように和気あいあいと暮らせる世界の実現です。

2000 年暮れから、組織運営、経営経済、家庭生活、人間関係などの課題に取り組み、試行錯誤を重ね、研究と実験を日々積み重ねながら、規模は小さくとも、人間性に適ったコミュニティづくりを試みています。その社会を、我々は「やさしい社会」と呼んでいます。

コミュニティと言っても、規約や制約がありませんし、義務や責任もありません。ですから、どこからどこまでがコミュニティであるという境界もありませんし、コミュニティのメンバーに関する規定もありません。故にはっきりした人数はわかりませんが、現在、大人で 100 人～150 人程度です。

メンバーの多くは、歩いて往来できる数百メートル圏内に暮らしていますが、中には数キロ離れた所に住みながら活動を共にしているメンバーもいます。

様々なコミュニティビジネスや各種の市民活動が、それぞれ自発的に展開され、関連し合い、繋がり合い、一つのコミュニティを形成しています。

近年は、国内外から見学者や研修生を受入れ、新しい社会づくりのネットワークの拠点ともなっています。また、日本や世界のエコビレッジやトランジションタウンのネットワークとも繋がっています。

2-3 家族のような繋がり

アズワンコミュニティの立ち上げから一貫しているのは、揺るがない家族のような近しさ親しさです。一見すると個々人はどこにでもあるような暮らし方をしていますが、その内容・実質は、「大きな一つの家族」で、物もお金も互いにオープンに、自在に生かし合って暮らしています。

その「大きな一つの家族」がベースになって、「ファミリーアズワン」という仕組みや、お金を介在しないコミュニティ経済といった隔たりなく暮らせる様式の実験も試みられています。

2-4 無駄のない、モノもエネルギーも生かされる世界へ

ある研究によると（注 1）、エコロジカル・フットプリントを用いて計算した資源利用量は、アズワンコミュニティでは1.6と、日本の平均の2.4を下回る結果が出ています。その研究では、「頻繁に各家同士で食事を共にしたり、野菜や米などの生産物や惣菜・弁当などの食品を共有することで、買い物にかかる移動距離や調理にかかるエネルギーが削減されることで、日本平均以下となっていることが推測される。・・・ギフトエコノミーによる生産物や食品の共有、光熱費用の削減は、家計の軽減につながっていると思われる」と分析しています。

そのような観点から、アズワンコミュニティがどのように運営されているのか、その一端を紹介してみたいと思います。

A 繋がりの中でのビジネス

自分達の目的に適った会社を試みようと、いくつかのコミュニティビジネスを展開しています。
それぞれ独立した会社ですが、相互に協力し合い、コミュニティづくりと有機的に繋がった産業活動を行っています。
ここでは 3 つの事業を簡単に紹介したいと思います。

●おふくろさん弁当：
地域に愛されるお弁当屋さんを目指して、できるだけ地元の材料で、できるだけ手作りの弁当を生産し、一個から配達し、今では、一日千食近くを届けています。コミュニティや地元の人の働き場として、そして、コミュニティにとっては我が家の大きな台所として活用されています。

●SUZUKA FARM：
コミュニティの若者達が立ち上げた会社です。地域農業の担い手として、耕作放棄地の活用も含めて、米や野菜の大規模生産に取り組んでいます。自分達が作った米や野菜を、一番食べてほしい人へ贈りたいとコミュニティの人達にプレゼントとして届けるようになり、暮しを豊かにする一役を担っています。「おふくろさん弁当」の食材としても大いに活用されています。

●鈴鹿カルチャーステーション：
　子どもも大人も育つ社会づくりの拠点として、新しい文化の創造と発信、そして街の学び舎づくりが日々進行しています。コミュニティステーション、カルチャーステーション、エコステーションという三つのステーションを事業軸として展開し、新しい人と人との出会いや繋がりが生まれています。

また、アズワンコミュニティステーションとして、コミュニティの人達の拠り所、憩いの場として活用されています。

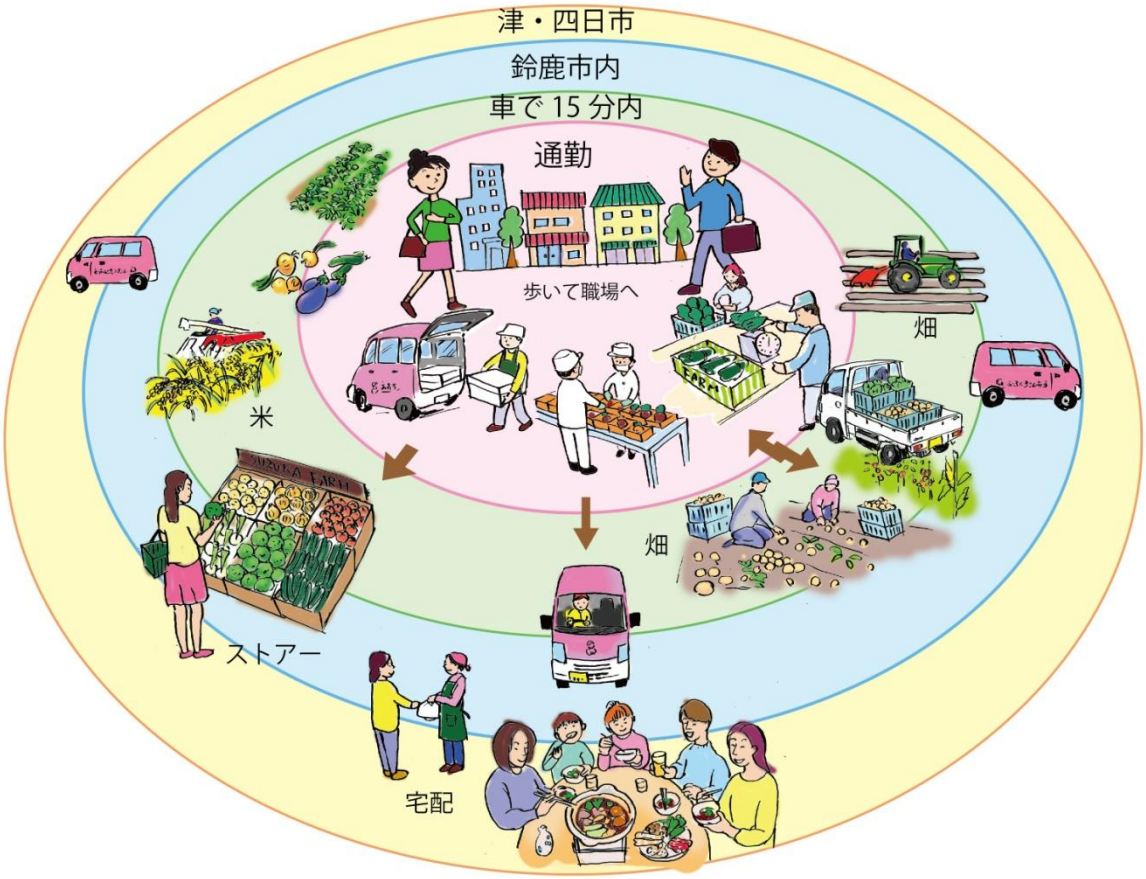
B 地産地活・職住近接

コミュニティに関わる多くの人達は、鈴鹿カルチャーステーションから半径 1 キロ以内に住んでおり、街のはたけ公園もその中にあり、ほとんどの人が各職場まで徒歩 1 分～10 分程度です。

SUZUKA FARM の田畑も、車で 15 分以内の所がほとんどで、カルビーにジャガイモを出荷している以外は、米も野菜も、ほぼ全量地元で食べてもらっています。

おふくろさん弁当も、ほぼすべて鈴鹿・四日市・津の地元・近隣の街へ配達されます。

メンバーのほとんどが近くに住み、自分達で産業を興し、地域と密接な繋がりを作ることで、移動・輸送にかかるエネルギーが非常に少ない状態を実現しています。



C はたけ公園と里山との連携

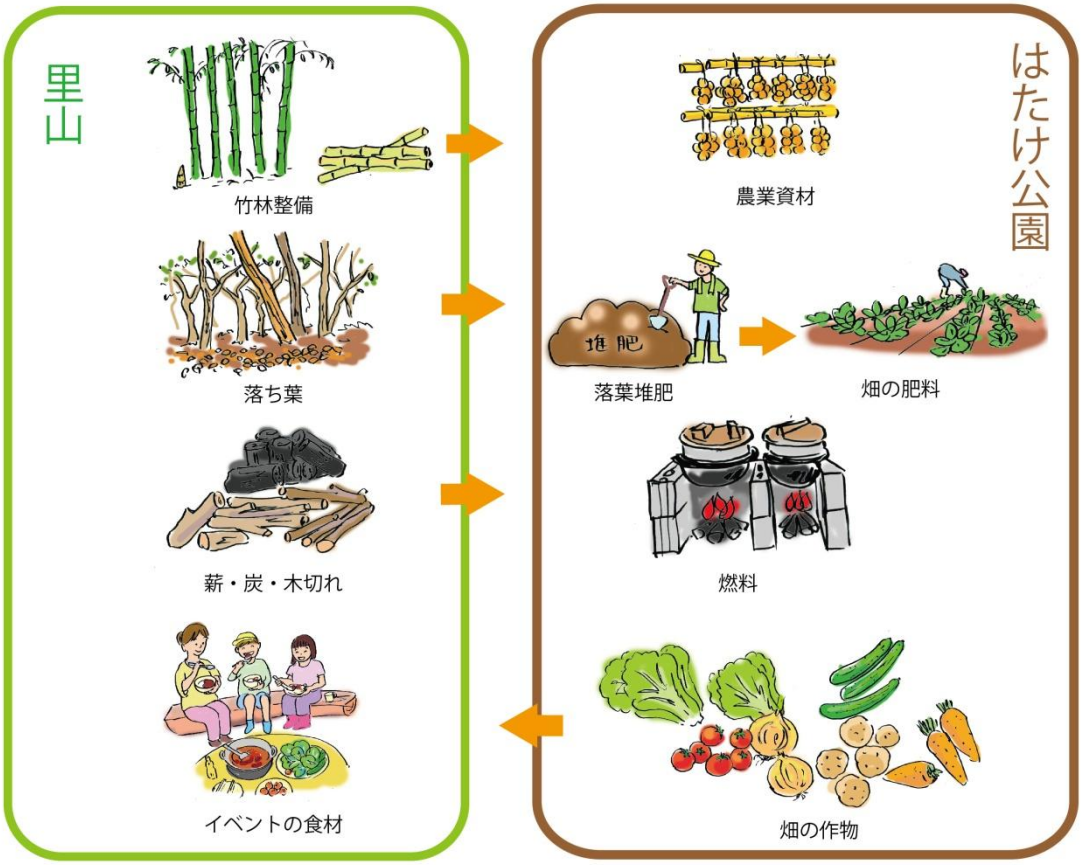
はたけ公園は鈴鹿カルチャーステーションから歩いて 5 分ほど、里山は車で15 分の所にあります。これらの場所があることで、人々の暮らしに潤いが生まれ、また物や資源の地域循環が始まり、豊かさが齎されています。

●街のはたけ公園：

管理が難しくなった畑を借り受けて整備を進めています。SUZUKA FARM の拠点でもあり、地域の人達が農ある暮らしを味わえるフィールドでもあります。
一年を通して、「はたけに行こう、はたけで食べよう」という企画があります。野菜のタネを蒔き、育て、食べる。それを通して、子供からシニアまで、多様な人達が親しく集う交流の場になっています。
公園には、広場があり、カマド・ボイラー・井戸・エコトイレなどがあり、薪で料理をし、食べ、遊び、憩う場になり、災害時には避難場所にもなります。

●すずかの里山： 西の郊外丘陵地に、自然の営みと人の暮らしがほどよく調和した里山づくりが進んでいます。里山が大好きな有志が、3 年かけて整備を進め、街の子ども達が 落ち葉を踏んで遊び、学べる場にしてきました。キノコ栽培も手がけ、本格的な炭窯を作りました。
市の協力により、地域の雑木林の手入れをし、そこから出る原木をもらって、炭を作り、暮らしの中での炭の活用を進め、地域でのエネルギー循環を進めています。炭作りは、原木伐採・火入れ・火の番・炭出しなど、子どもからシニアの人まで、多くの人達の楽しみの場になります。
はたけ公園と里山は緊密な連携があり、里山の落葉や木切れや炭は、はたけ公園で堆肥やカマド・ボイラーの燃料として活用され、はたけ公園の農産物は里山企画で料理され供されます。

有志で里山
炭窯づくり
里山づくり
市の協力
住民の里山整備
原木をもらう
炭づくり（多くの人の楽しみ）
炭
七輪
バーベキュー
焼き芋
炭を活かした暮らし
里山プロジェクト


里山
竹林整備
落ち葉
薪・炭・木切れ
イベントの食材
はたけ公園
農業資材
堆肥
落葉堆肥
畑の肥料
燃料
畑の作物

D お金を介在しないコミュニティ経済の始まり

人と人が家族のように親しくなり、隔たりがなくなることで、贈られた物を自在に活用し合う経済の試みが始まりました。

アズワンコミュニティでは、地域通貨 RINKA を、2010～2013 年まで試みていました。LETS（local exchange trading system）方式を参考に、電子決済システムで運用し、月間 300～400 万円相当の RINKA が流通していましたが、2013 年にお金を介在しないコミュニティ経済の試みが始まり、運用が終了しました。

「コミュニティストア」という、お金を介さない、ギブアンドテイクでもない、一方的に贈り、一方的に齎される仕組みができました。そこは、今後、コミュニティの物質経済のセンター的な役割を担っていくようになると思います。始まったばかりの「コミュニティストア」の試みですが、その現状を簡単に紹介します。

●SUZUKA FARM から： 米や野菜や果物が届けられます。市場に出荷されるような野菜も届けられます。もちろん、市場に出荷できない規格外の物も届けられます。

コンテナで運ばれて来て、各自がほしい分だけを持っていきます。計量や包装の手間が要りません。

●おふくろさん弁当から： 夕食の惣菜が夕方に届けられます。コミュニティの台所として、SUZUKA FARM の野菜で今豊富にある物や、弁当のために安く仕入れた素材、そして残った材料などが調理され、コミュニティの夕飯として提供されます。約 100 食分の惣菜が、トレーで運ばれ、ほしい人がタッパーを持って来て詰めて帰ります。包装やパックの無駄が省けるのはもちろん、家庭の主婦が調理に要する時間内に、弁当屋では一人で約 100 食分を調理できます。つまり、コミュニティとして、より少ないエネルギーで調理できるのです。各家庭で、メニューを考え、買い物に行き、2～5 人分の調理をし、片付けることを考えると、コミュニティとしてかなり合理的になります。

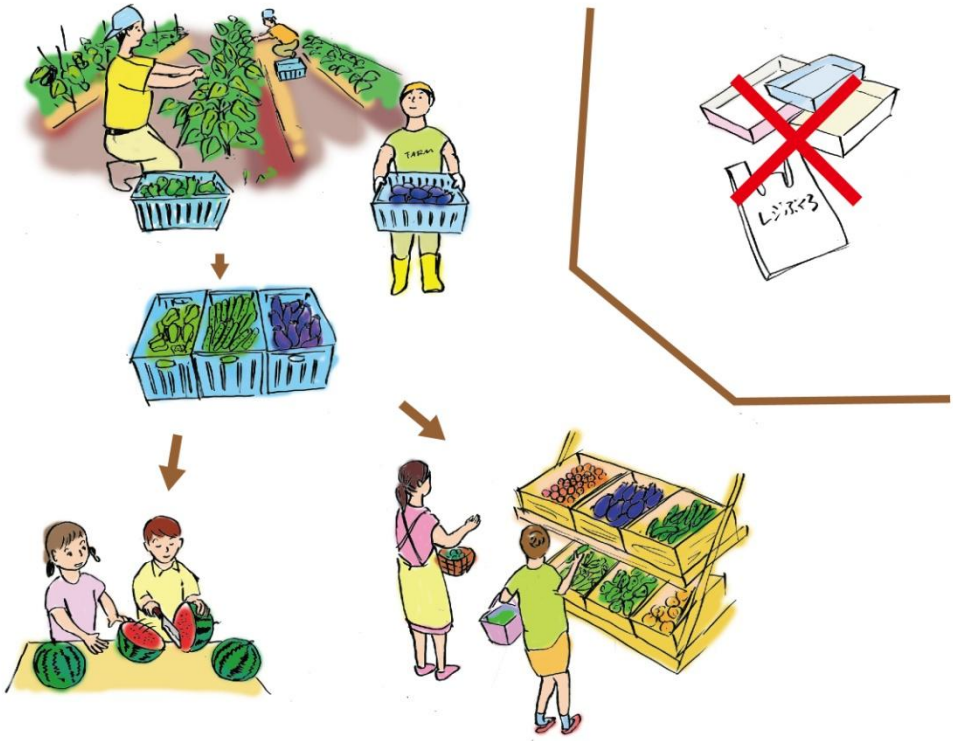
もちろん、家庭で調理したい人はそうできますし、活用したい人が惣菜を取りに来るのです。

弁当が売れ残る場合も、ストアへ届き、活用されるので、コンビニなどのように廃棄されません。

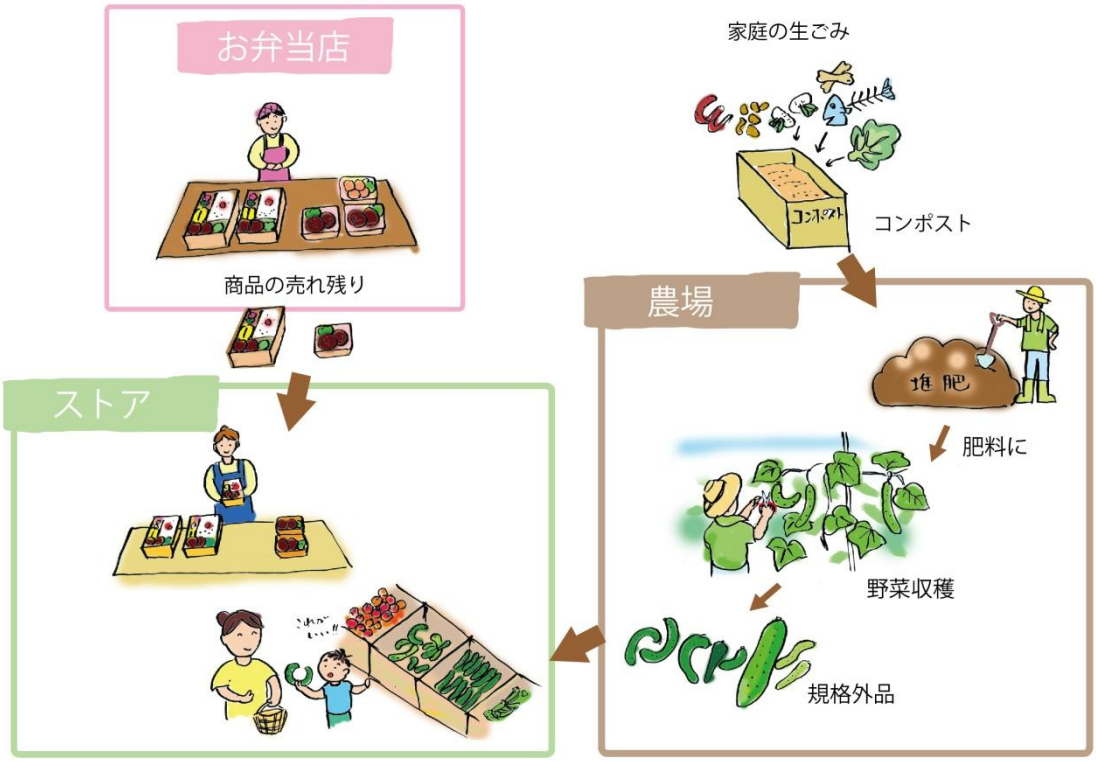
●買い物上手な人から： 日常品もお店等で安くまとめて買って置いてくれます。ファミリーとして家計を一つにしている人達は、その品物を持って行きます。日常的に必要な物が揃っているので、個々でスーパー等に買物に行く頻度が減り、週に一回程度で済むという声もよく聴きます。各人が買い物に行くための時間・エネルギーも減っていきます。

●贈りたい人達から： 街のはたけ公園から野菜や果物が、里山から椎茸や炭や木作酢が届けられます。各人の得意な手作りのお菓子やお味噌・漬物など、庭に実った柿や、山で採れたタケノコや山菜や栗、海で採れた貝や魚、交流のある各地の人達からの贈り物、そして海外の韓国やブラジル等の親しい人達からのお土産が並ぶ時もあります。

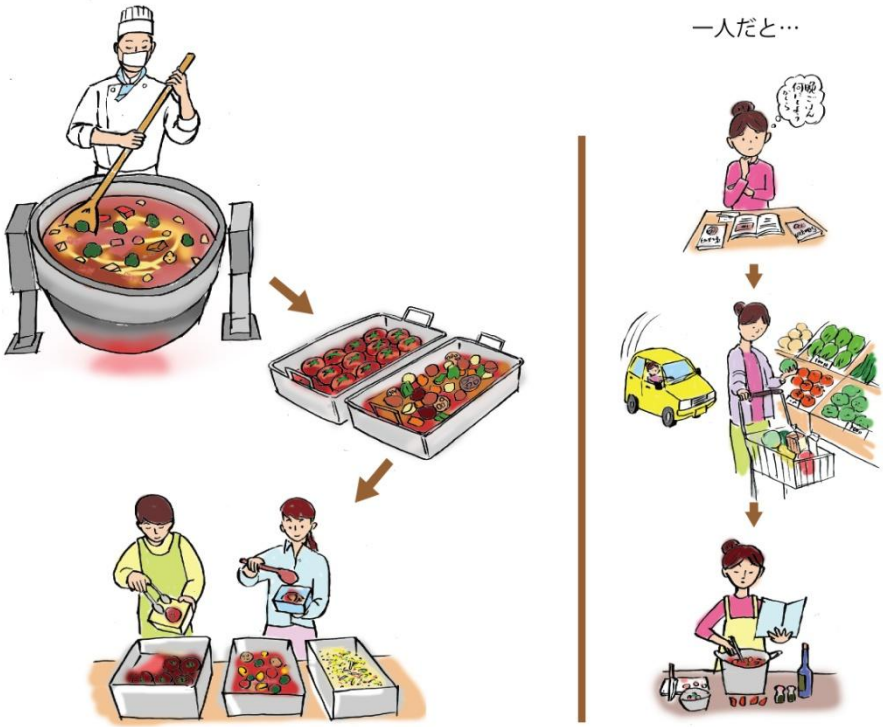
（計量・包装が要らない）



（棄てる物がなくなる）



（一人で約 100 人分の調理）

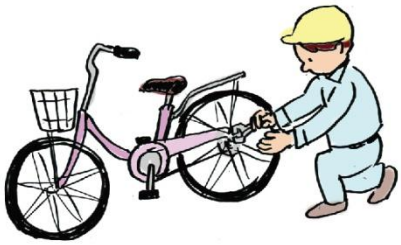


●物以外にも： 贈る行為は物だけにとどまらず、知恵や技術や能力にも広がります。例えば、コンピューター・家電や自動車・自転車の購入・修理・サポート、旅や引っ越しの手配など、素人では手に余ることを、得意な人が気軽に引き受けてくれます。

パソコントラブル解決

包丁研ぎ

パソコンレクチャー



自転車修理

3　エココミュニティの成り立ち

3-1 目指す社会

アズワンコミュニティは、どのような理念で、どのような仕組みで実現されているのか、そのベースとなるところを簡単に紹介してみたいと思います。
アズワンコミュニティが目指す社会は、人も物も開放　自由自在　一つの世界。
それは、誰もが人間らしく、自分らしく、怒りや争いなく、豊かに暮らせる、やさしい社会です。
そのベースは、旧来の主義・思想・宗教などに依らない、万人に共通する人間の本来性。
人間の本来性を解明し、その発現を妨げている要素を探究して取り除き、人間の本来性に適った揺るぎない社会を実現しようとしています。
人に対する束縛や強制を社会や組織からなくすことと、利己的になり、他人に対立的になる心理面を解放することに最も重点をおいています。
それは、自分を知り、人生を知り、社会を知ることとも言えるでしょう。
一足飛びには行きませんが、自分を愛し、人を愛し、社会を愛し、あらゆるものを大切に生かし合う、お互いの成長に応じて、「人の自由」と「社会の自由」を両輪に、愉快に面白く実現しつつあります。
宇宙・自然の万物、どこにも壁も隔てもなく、あるものは誰もが使える「一つの世界」。
当たり前のことがやさしく行える、シンプルな「やさしい社会」を目指して活動しています。

「一つの世界」の実現の仕組みとして、「コミュニティオフィス」が始まりました。家計や生活設計など個々で考え囲わなくてよく、報酬や支払いの煩わしさもなく、誰もがその人に応じて、なんでも任し合い、融通し合えるオープンな家庭生活へと実現していく仕組みです。
産業活動、市民活動、暮らしなど、すべての事が「コミュニティオフィス」で検討され、開放された世界の方向へ進んでいきます。

3-2 コミュニティの基盤

人としての成長をサポートする「サイエンズスクール」、人と社会を科学する「サイエンズ研究所」、この2つが、コミュニティ活動のベースをなしているという点が、アズワンコミュニティの特色の一つになっています。

サイエンズスクールは、各自が考え方や生き方を調べ、反目や依存のない自立した人として成長し合うための場であり、人を責めたり統制する必要のない社会気風の源泉とも言えます。固定観念がなくなり、自分の囲い・人との境がなくなり、人として成長するに従い、人や自然や物を愛する心が育ち、凡てを大切に生かせるようになっていきます。

サイエンズ研究所では、人間や社会の本質を探究し、人として成長する要素の解明や方法の考案、新しい社会組織の研究や運営要素の解明などがなされ、そして常に現状の分析・解明・検討が行われ、その研究内容がアズワンコミュニティやサイエンズスクールなどに、試され生かされています。

これらの基盤があることによって、どんな活動も、苦労や努力して運営することよりも、みなの知恵を駆使して見直し考え直すことを優先し、起業したり白紙に戻したり、楽しく面白く活動しています。

4　最後に

もったいない学会の目指す「脱浪費社会・心豊かな社会」の実現のために、同じ志の人達と連携を取り合い、協力し合い、新しい社会のモデルづくりを進めていけることを願っています。

個人主義でもない、全体主義でもない、そして自然とも調和した新たなる社会像を探求しています。

個々の主体性・自由が尊重されながらも、境・隔てのない関係性が織りなす、人も物もエネルギーも活かされる調和する社会です。

それは、人と社会の本質を解明して、人として成長する機会と、人の本来性に適った機構を確立することで、実現されていくのではないかと考えています。

アズワンコミュニティの試みは、まだ歴史が浅く、規模も小さな初歩的な段階ですが、そのような可能性を持った一つの参考資料として、世に提案・提供したいと思っています。

アズワンコミュニティを見学・体験できる機会もありますので、実際に足を運んで、実態を見てもらいたいと思います。そして批判や提案なども寄せてほしいです。知恵と力を合わせて、より良きものに発展させていければと考えています。よろしくお願いします。

（注 1）『H24 ニッセイ財団環境問題　若手研究奨励研究助成報告書「持続可能な暮らしの実践における環境負荷軽減の取り組みおよび生活満足度に関する研究報告書（2014.3）』　P16